

最悪の忍耐放棄としてのやけ（自棄）

— 自暴自棄論 —

近 藤 良 樹

（広島大学名誉教授）

1. 鬱憤の鬱積

【超自然の忍耐を反自然的に放棄する愚行】忍耐は、苦痛（辛苦）に耐ええなくなると放棄される。その放棄は、冷静であれば被害は小さく再挑戦の可能になることも多い。だが、そういう合理的で自然な放棄にとどまらない愚かしい終わり方をすることがある。苦痛回避衝動（自然）を超越する自由の営為がひとの忍耐であるが、この忍耐に失敗し自然（苦痛）に負けたのであれば、そのまま生の自己保存則をもつ自然に帰ればいいものを、そうせず、反自然に固執して、理性も自然もかなぐりすてて、自身を陥れる終わり方をすることがある。自暴自棄という愚行である。

ひとの忍耐は自然超越の創造的営為であるのに対して、自暴自棄（やけ）をもつての忍耐放棄は、自己破壊という、自然もあきれはてる終焉となる。やけは、自分で自分を創造し支配する、人の尊厳の端的をなす自律自由の乱用であり、自分で自分を破滅させる反自然で反理性の最悪の忍耐放棄となる。

やけ（自暴自棄）とは、「ものごとが自分の思うようにならず絶望的になって、なげやりとなり、自虐的に鬱憤を暴発させて、見境なく当たり散らすことである」と定義してよいかと思うが、このやけ（自棄）について、その具体的な展開を、以下に見ていきたい。やけは、賭け事に負けての鬱憤晴らしのような、単細胞で短気なもののその場限りでの感情的暴発の些事にも言われる。が、こ

こでは、破産した企業家とか愛児を失った母親などがときに陥る、人生をつぶすような長期にわたる深刻なやけを念頭において論じたいと思う。

【鬱憤鬱積の忍耐】ひとは、動物とちがい未来に生きる。身近なことでも、未来にまず自由に目的を立てて、その実現にと目的論的に動く。その現在の生の本来は、未来にあり、望むもの・価値ある目的を描いて、これの実現へとこの現在を展開する。だが、未定の未来の目的のこと、望みが高すぎれば、実現しないことも多くなる。これが些細なものであれば、時間とともに欲求をおさめて不満も消失していくが、人生の根幹をなす、棄て去れない望み・欲求の場合、その不充足の不満は、残り続ける。それが反復すれば不満の鬱積となる。

消失しない欲求・欲望の不充足状態に、ひとは、我慢・辛抱を強いられ鬱憤をため、これに耐え続ける。そのひとの生そのものをなすような、生きがいとなるもの（自己のアイデンティティをなす仕事とか勉強など）での不充足は、時間を重ねるほどに、耐えきれない大きな鬱積となっていく。

【穏和に歩める道の途絶】ひとは、自制心をもつ。快にひかれるのを自制・節制し、苦痛から逃げるのを抑止して自制・忍耐する。多くの現代人にとっての人生そのものをなす仕事とか勉強は、不快であっても、それが自分の生の根幹をなすものであれば、自制と忍耐をもって真摯にその営為を続けていく。その営為につまずき受験失敗とか失職に至っても、その苦悩をうちに抑えて平静を装い、自制心をもって忍耐し続け、未来に望みを託す。

だが、どう立ちまわっても、その未来への希望の絶たれた状況が変わらないとなると、忍耐は、耐えうる限界になっていく。若年者の絶望では、目につくのは学校や職場でのトラブルだが、その根底には、自身ではどうしようもない家庭の窮境や心身の劣弱状態等の絶望があって、複合的に（したがって、イラつき不機嫌になる真の理由は、本人にもよく分からないままに）絶望の渦にのみこまれていくことが多い。如何なる試みをもってしてもその未来の扉をひら

くことは不可能となれば、我慢しても意味がないと、自制・忍耐を放棄しがちとなる。それが暴発すれば、やけとなる。

2. 絶望

【希望の絶たれた絶望の苦悶】希望は、受験での希望校がそうであるように、自身の実現可能な一番価値ある望み・目的である。人生の中心に位置する希望の場合、それが絶たれると、その人生自体を奪うような絶望を引き起こす。愛児を失った母親は、人生そのものへの絶望感にとらえられるであろう。未来を絶たれ、現在の生を無意味・虚無化し暗黒化する。

ただし、その希望も絶望も、自身の思い込みで、妄念に近い場合も少なくない。受験で第三希望すら絶たれたとしても、その生き方を変えれば、絶望せず、それなりの別の希望の道が見出されてくる。しかし、ひとは、ヤドカリのように、自身の見つけ出した精神生活の殻・カプセルに固執して生きる。その思い込みの殻（例えば諸芸術の作家志望）が現実離れした夢で、ほかにいくらでも希望はあると周囲から指摘しても、新たな殻に引っ越すヤドカリを見習う者は少なく、当人は、逼塞した殻のうちに窒息状態（無名作家）となる。こんなことだと思うようなものにつまずいて絶望するようなことになる。ひとは、各自の信念、価値観のもとに生き、周囲からは偏狭とか低劣と見なされるものであっても、当人には深刻で、鬱憤となり絶望となる。

絶望するかどうか、やけになるかどうかは、個人の資質・心構えに負うところも大きい。逆境（劣悪な家庭環境、心身の劣弱な状態等）であれば、これに絶望して、切れて自暴自棄になることが生じやすいが、この逆境を尊い試練と捉えて、闘魂を奮い立たせ、一層たくましくなっていくこともある。

絶望して苦悩・鬱憤を鬱積させていくとしても、その忍耐の間、創造的な解決策を見つけだせれば、たとえば（男女の作家の一部に見られるように）心身

劣弱等の逆境の絶望・鬱憤を、知的営為でのがむしやらのエネルギーにできるならば、これに己を託して生の充実した営みを再開できる。だが、もはや創造的な生は不可能と見切りをつけると、極端な場合、絶望が自分を屍にしていくなまにまかせるか、旺盛なエネルギーを残してその行き場がなければ、しばしば、自暴自棄（やけ）にと暴発していく。

【やけを、英語では「**desperation**（絶望）」と訳す】和英辞典を引くと「やけ」の訳語としては、まず「**desperation**（絶望）」と出てくる。自暴自棄（やけ）の心の中を見ると、その根底にあるのは、希望(**spes**)を剥奪(**de**)されての絶望(**desperatio**)であり、漢字の自棄よりは、絶望の方がやけに近いかも知れない。だが、絶望を耐え続けて忍耐する者は、なお、やけにはなっていない。足を失った若者、愛児を失った母親は、希望を剥奪され絶望するだろう。だが、かならずしも、やけにはならない。絶望自体は、やけではない。絶望に耐えきれず、やけになるのである。

和英辞典は、いまでも、やけを絶望と捉えるが、文学では、明治の二葉亭四迷が絶望に「やけ」のルビをふっている。『浮雲』（第九回）に、やけを起こしたというところに「**Despair** を起こした」と書き「デスペヤ」と英語にルビをふり、そのすぐあとに「絶望気味」と書いて、これに「やけぎみ」とルビをふっている。やけを絶望と解したようである（なお、「暴」に、ひどく、という意味で「やけ」のルビをふり（第一回）、後年の著『平凡』（第二十三回）には、「自暴を起こし」と「自暴」に「やけ」のルビをふってもいる）。だが、後続のひとたちは、絶望ではなく、ふつう、やけは、漢字では自棄、自暴、自暴自棄等で言い表した。

やけは、絶望をうちにもっているが、絶望した者は、かならずしもやけにはなっていない。未来への道は絶たれてしまったと絶望しても、これに耐え、家族のために歯を食いしばって生きることもある。絶望に耐え得ず、自身のその

真摯な営為を放棄し、自虐的になることで、やけになるのである。

3. なげやりになる

【途方にくれ、無気力化】絶望は、希望を奪い未来への道を封鎖してしまうから、人は、途方にくれてしまい、生きるすべを失い、無気力化していく。足を事故で失って絶望する場合、まずは歩行について絶望的となる。と同時に、そのことから派生する日常生活、仕事などにも、途方にくれて絶望的になっていく。ひとは、未来に生きようとする創造的意志をもっているが、絶望では、その未来が閉鎖されて、自身の力を注げる有意の場が消えうせてしまい、出口のない暗闇の中で、七転八倒もがき、やがてあきらめて、日に日に無気力となってしまう。おのれの生きる場を窒息させた絶望に懊悩する者は、どうにでもなれと、自己の真摯な生の営みの放棄にむかう。内的に無気力となり、その営為において投げやりとなっていく。

どんなに辛いことが続いても、希望があれば、ひとは、その苦難の現在に耐え続けることができる。未来の希望が現在を逞しく生かしていく。だが、その希望の剥奪、絶望は、未来を奪って、現在を空しいものにしてしまう。未来への出口をふさがれた絶望の漆黒のなかで、窒息させるような苦悶が続けば、人生の諦念へと向かい、人間的営為への無気力はおろか、生きる気力さえ失い、人生自体の放棄へとつながるようなことも生じる。

【切れて、なげやりに】絶望の無気力状態においては、何を求められても、むなしくて、こたえる気にはなれず、どうにでもなれと投げやりになっていく。生きがいであったものに絶望すると、それに関わる多くのものが無意味になって、次々とこれらに投げやりとなり、その無気力・投げやりは、汎化していく。おのれのアイデンティティを形成するところ（学校、職場あるいは家庭）での絶望は、その生の全体をとらえ、どうにでもなれとの投げやりは汎化してしま

う。やけにと陥っていく。

絶望しても、やけになるとは限らない。絶望で無気力に陥っていても、なお社会的対応に鈍いぐらいで、なげやりでなければ、やけではなかろう。とすると、なげやりにと、つまり、やる気なく、なすべきことをどうなろうと知ったことではないと無責任に放棄するような実践的対応にと一歩踏み出した時点からを、やけと見ればよいのかと思う。絶望は、陰鬱の無為にとどまるが、やけは、絶望しつつも真摯であったのをやめて、やる気のない無責任な態度をもって、なげやりな振る舞いに踏み出したものであろう。外に向けて、なげやりにと自身を遺棄することで、自棄はなる。

絶望は、やけを作り出すが、辛いその絶望から逃げず耐えている状態では、なお、やけにはなっていない。かつ、絶望への忍耐を放棄するとしても、冷静に退却して、なげやりでなく損傷を最小限に抑えての放棄なら、やけではなかろう。やけになる者は、どうにでもなれと、耐えた分をも投げ捨ててご破算にし、なげやりになる。さらには、どうなってもかまわないと、たまった鬱憤をどっと吐き出し暴発するにいたる。穏やかに休学、休職して休めばいいものを、なげやりになり、積み上げたものも投げ捨てて、退学、退職へと突き進む。やけは、絶望の歩みに耐えきれず、これを投げ捨てて、「切れる」。理性（ロゴス）の制御は無力化し、破壊の激情（パトス）が手綱を切って、暴走していく。

【あふれる生命力はアウトサイダー化】 希望のある生を営んでいた者が、その希望を失い絶望状態になると、注いでいたエネルギーは、行き場を失う。未来はないと、なげやりになり、理性的制御をすてて切れると、あらぬ方向へ暴発していく。特に、生の活力が横溢して元々暴走しやすい思春期の場合、生を実感できる残存領域が、刹那でプリミティブな方面にしかないとなると、ギャングブル、麻薬、性、暴力といった非行へと自虐的に走ることも生じる。希望を剥奪され社会から疎外された自棄の者は、その社会のアウトサイダーとなって、

既成の規範・秩序を踏みにじり、ときに、疎外された者同士で徒党を組んで、ぐれて逸脱の深みにもはまっていく。社会の外に弾かれ孤立を深め、社会を拒否する形で「引きこもり」となる場合もある。

4. やけ（自棄）は、自分を遺棄する

【日本のやけは、自棄、自己を遺棄する】やけは、昨今、漢字では自棄と表記する。自棄は、「自暴自棄」とちがひ、普通はジキとは読まないで、「やけ」と読む。やけとは、自分を遺棄することだという理解なのであろう。「自棄」を英語に直訳すれば、self-abandonment、自己の放棄である。だが、それではやけの意味にはならず、辞典は、abandon oneself to despair（仏和辞典でも、s'abandonner au désespoir）と「絶望への自棄」と、「絶望」を付け加えている。絶望をもってはじめて、日本の「自棄」に近くなるもののようである。

西洋では、自己（ひと）は、神与のアプリオリなもので、その受精卵からして尊厳をもつという宗教的原理主義が通用する。この尊厳を持った自己の遺棄、自棄（≒自殺）は、神への反逆となる。だが、日本人の多くの自覚では、尊厳をもった人間の形成はアポステリオリ、生後のことで、玉ねぎのように無の芯に社会的な付与・贈与をもって皮（演じる役柄）を重ねていって、自分は、成る。生まれより育ちで、対他的に形成された皮としての自己は、絶対的ではなく相対的多重的で、かつ、玉ねぎの芯の自己など空無で、無我こそが真実の自己でもあり、自棄の表現は、大げさにならずに済む。

【自分で自分を棄てる】「自棄する」といっても、邪悪な自分を棄てるのなら、やけではない。そのような立派な自棄（じき）は、克己であり、無我・没我に近づく。やけで棄てられる自分は、逆で、希望をもってそれに生きてきた尊い自己である。その誇らしい役を演じきれず、なげやりになり、その情けない自己を嫌悪し、これを自らが棄てるのである。ひとは、自身を対象化し他者化して

扱える。苦難に耐えきれなかった自分を突き放して、情けないと唾棄する。

忍耐放棄しても、冷静なら、それまでに耐えた分の成果は残して終われるであろう。だが、やけになるとすべてをご破算にする。自身の積み上げてきたものを放擲してしまう。必須科目の授業に絶望し、我慢ならず、忍耐放棄して落第しても、冷静なら、蓄積した過去を大切にとっておくであろう。だが、自棄では、それまでに蓄積してきた自分（の価値あるもの）を遺棄する。休学、留年ではなく、「もうやめだ、ご破算だ」と退学する。なげやりになり、過去の自分を棄て、絶望の未来の自分を棄てる。絶望は、自分に耐えており、自分を棄ててはいない。だが、やけは、自分で自分を潰す、自分を遺棄する。

自棄は、自己（玉ねぎの皮のように幾重にも重なった多重の自分）を一律にすべて遺棄するわけではない。仕事とか勉強に真摯だった、社会に従順な自己は、破棄し、反社会的になる。だが、健忘症的な、自棄になっていることすら忘却するような自己の遺棄は、一般的ではない。あるいは、親友に関わるようなところでは、自棄は出さず、自分を取り戻して、笑顔を見せる。

【自分を棄て、自分の社会を棄てる】やけになると、真摯に営々と積み上げてきた社会的な自己を棄ててしまう。自分が長年培い担ってきたその役を破棄するということは、その所属の社会と歴史を破棄するということである。学校や社会に対して、そっぽを向くことになる。その社会を律している規範・秩序といったタガを、自棄になった者は棄ててしまう。自分そのものをなす希望が拒絶されたのであり、自分は排除された、遺棄されたという意識をいだき、所属の社会への強い鬱憤をもち、元気があり機会があれば、これに仕返しをしようと、攻撃的破壊的な振舞いに出る。

が、昨今は、そとに出ての反社会的行動よりは、うちで、社会と隔絶した非社会状態をつくる引きこもりが目立つ。いじめなどをきっかけにして、嫌悪すべき社会と接触を断った不登校とかニート状態になる。自己が成長するための

（あるいは精神的な病を癒すような）温和な繭籠りであれば幸いであるが、少なくないものが、絶望して自虐の座敷牢に閉じこもっているように見受けられる。情けない弱虫の自分を責め、無念の座敷牢に蟄居して鬱憤をためて耐え続ける。無念・無実を自身のうちで晴らすことができれば自縛を解き人間的自由の歩みの再開となるが、そうでなければ、しばしば、その苦悶状態が耐えがたくなって、切れて暴発する。

5. 見境なく当たり散らす「やけ」

【鬱憤を暴発させる自暴自棄】やけは、どうにでもなれと（自己と社会に背を向け）なげやりになるとともに、しばしば、（自己と社会を強襲して）発作的に鬱憤を暴発させる。暴力的に鬱憤を晴らしていく。自分のそとのものに暴発するのみでなく、自暴自棄であり、自分も破壊していく。

やけのベースにある絶望自体は内に閉じこもるが、残された活力は、創造的方面には行き場がなくて（あれば、希望を確保して絶望からの解放となる）、鬱憤晴らしの暴発になっていく。理性（ロゴス）での歩みは行き詰まり、その個我を担う感性（パトス）に、その激情に身を委ねる。国家は、法・理性をうけいれない者に最後の手段として暴力（権力）をつかうが、やけは、筋の通った言葉（ロゴス）を失って反ロゴスのパトスを暴力的に晴らしていく。

夏目漱石は、『明暗』（一五二）で「自暴棄」に「やけくそ」とルビを打っている。やけとは、自暴、自分に暴力を働くことと見たのであろう。自棄は、自分を投げ捨てる。やけは、さらに、自分の破滅へと暴発する。「自」己と社会に向かって「暴」力的となり、当たり散らす（『孟子』（離婁上）の自暴自棄の「自暴」の者は、自分をそこない非道の暴言を吐く者で、共に語りあうことなどできない輩であり、その「自棄」の者は、愛も正義も棄てた、真っ当な者が行動をとともにすることのできない輩であった。漱石『明暗』の「自暴棄」の者は、

何をするか解らない乱暴者を形容したもので、孟子でいうと「自暴」より「自棄」になる。本稿「2. 絶望」節にふれた二葉亭四迷の「自暴」も、親の金を盗んでの出奔を形容しており、孟子では「自棄」に相当する。漱石、四迷の自暴は、そのルビの通りに現代日本の「やけ」を語る）。

【見境のなさ】絶望でなげやりになって、社会の既成の秩序とか規範といった良識のタガをはずしてしまっているのです、その鬱憤晴らしは、見境ないものになる。破壊・攻撃では、その対象と方法を見定めるのがひとのみか動物でも大原則であるが、やけでは、それすら失う。腕にとまった蚊を潰すにハンマーを打ち下ろし、腕まで潰すようなことをする。激情に圧倒され思慮分別を停止させた見境ない破壊行動となる。社会からのけ者にされたと疎外感を抱く自棄の者は、社会全般を鬱憤の対象とする。あらゆるものが破壊の対象となり、見境ないから、しばしば短絡的に、そばにいる者の振る舞いが攻撃の対象になる。

敵を見失い、後先を考えることのない見境ない暴発は、自棄から立ち直ったとき自身に重い足かせをはめることになる。それは、ときには犯罪となり、これを一生背負って行かねばならなくなる。自棄の見境なさは、自身の人生への見境なさでもある。

【当たり散らす】やけになった者は、鬱憤を周囲に暴発させて、当たり散らす。鬱憤の原因が特定されるものなら、それに向かうだろうが、鬱憤は、諸営為のもとに累積している。社会から疎外されているという意識のもとでは、社会全般へと鬱憤をもつ。耐えきれず激して爆発するような場合、鬱憤を晴らすことが第一で、その対象は、きっかけにできるものなら何でもいいということになっていく。

自分が弱虫で情けないために陥っている絶望との自覚のもと、やけは、自虐的に自分を破壊し自暴となる。自分をおとしめ傷つけて、自身に当たり散らす。その自暴の度が進めば、ときに、自己の抹殺、自殺にまで進んでしまう（いま

の日本の若者の死因の第一位は、自殺である。絶望の末の自暴の自殺がほとんどであろう）。外に向かって当たり散らす場合、短絡的で、身近なもの・無抵抗のものがターゲットになりやすい。自分の部屋の壁に穴をあけ、ドアを蹴破ったりする。外向きで狂暴になった場合、理不尽の極みの通り魔ともなる。あるいは身近といえば家族で、母親の疲れ切った顔が気に入らないと、いじめ等の鬱憤のすべてを吐き出してバットをふりまわすようなことをする。

6. 「焼け」としての日本のやけ

【やけは、暴発・炎上し、延焼していく】絶望の末の自暴自棄を日本語で「やけ」という。「やけ」と言うことでしっくりするものが日本人のもとにあるのだろう。やけの内奥には絶望がわだかまっているが、絶望とやけの違いは日本語のもとでは大きい。やけは、絶望の自己内閉塞とちがい、暴発炎上の特性をもつ。日本のやけは、焼ける。暴発する方面に大きく傾く。将棋に負けて絶望する者は、うつむいて嘆息をもらす。やけになった者は、激情抑えがたく、いきどおり将棋盤をひっくり返して当たり散らす。

やけを、和英辞典は **despair** と絶望をもってするが、辞書の編者たちは、日本の幼稚で粗暴なやけを恥じて、そとに知られたくないと（かつては、日本の野卑な習俗を恥じることが結構あった）、当たらずと雖も遠からずの「絶望」で済ませているのであろうか。日本のやけは、粗暴で原始的であり、むやみやたらと当たり散らし暴発する。ちなみに、私情を交える暇のない同時通訳の（泰斗といってよい）プロフェッショナルに聞いてみたところ、「やけ」でまず浮かんできた訳語は **outburst**（暴発）だったと回答を得た。絶望にうち沈む姿ではなく、「かーっ」と暴発炎上するのが、日本のやけである。絶望は、陰鬱の無為にとどまり、自己を潰す暴挙には出ていない。だが、やけは、その絶望に耐え得ず、発作的に暴発して燃え上がり、自分で自分を潰す。

【甘えて幼児化した逆上・乱心】やけになると、粗暴・野卑な心性をむき出しにする。鬱憤晴らしの激情に支配されて、ときに、反理性の極み、発作的に逆上し乱心状態となる。「どうしてこんな情けない自分を生んだんじゃ。まともな受精卵もあったじゃろうが。責任をとれ。死ね！」と親に無理難題を言いかけて逆上する。「劣等遺伝子寄せ集めの情けないウジ虫どもめ！」と天に向かって唾を吐き、献身的な養育の恩を仇にして狂態を演じる（昨今の日本の殺人事件の半数は、親族間殺人である。法（正義）と理性で動く外の社会とちがひ、血を同じくする家では愛（パトス）で動く。家と外との区別立ての大きい日本では、憎悪等の負の感情が家で支配しだすと、「法」外のこと、しばしば悲惨なことになる。自棄の者が無法の凶漢になるのみでなく、自棄の我が子の狂暴さに耐えきれず、親の方が覚悟の私刑に及ぶこともある）。

絶望して、弱虫で情けない自分という自覚をもつ自棄の者が、暴君さながらに暴発して逆上・乱心の状態になる。その心の底には、幼児的なすねた甘えのあることが多いのではないか。甘えは、相手の特別の好意にと寄りかかる。幼児は、親に向けて、おもちゃが欲しいと店でだだをこね号泣して見せる。親には無茶を言っても聞いてもらえるとふまえている。やけは、社会から冷たく突きはなされ絶望の淵に沈んで、神にでもすがりたい、甘えたいという思いをうちにもっている。学校とか会社では、理性と法が見張っていて、通常、甘えた無茶な振る舞いはできず、自棄の幼児的発現、逆上・乱心は、多く、パトスで動く家でとなる。幼児が店員には決してだだをこねないように、やけの者は、甘えが許されない場面では、破壊的パトスの発動を抑止できる。逆上最中でも、警察が来れば、穏やかな市民に戻り、幼子の前では、優しい青年に戻る。

【「焼ける」の「やけ」】日本の「やけ」は、「焼ける」による（森鷗外（「食堂」等）は、自棄（やけ）を「焼け」と表記している）。「焼く」（他動詞）ではなく「焼ける」という自動詞の連用形名詞が「やけ」である。自動詞をもってする

のは、根本的に、やけは、自己責任とみなされているからであろう。自分で自分を焼くのである。要は、忍耐しきれず、自分に敗けて、自分が自分を痛めつけ破壊しているのだと、その最低最悪の忍耐放棄、自暴自棄を「やけ」は語る。しかも、単に壊したのなら破片・部品を拾い集めての再建・再生もできるが、焼いて灰燼に帰した、やけで破算にした自分（社会で培ってきた役など）の場合、再生復活は困難である。やけという言葉は、やけ跡の衰れを語る。なお、やけで炎上する逆上・乱心は、周囲への被害は大きい、発作的なものとして、長くは続かない。自身を破滅させる破壊力は、通常、逆上などよりは、やけでいつまでも燻りつづける絶望の無気力となげやりの方が大きい。

さらに、自棄をやけというのは、「焼ける」をもって、やけになった者が自身の社会的な営為等について、これを次々とやけに巻き込み延焼させていくことを語ろうとするのもであろう。絶望したことは、ひとつのこと、受験の失敗とか家庭の窮境であっても、やけになると、それにはとどまらない。積み上げてきた人生を自分で焼き払っていく。自棄から立ち直ったとき愕然とするほどに、次々とつぶし見境なく当たり散らしていく。江戸の大火のように、小さな火元からどこまでもやけ広がる自棄であれば、やける「やけ」は、「自暴」「自棄」といったり「絶望」というよりは、甘えて当たり散らしていく日本のやけを、より良く捉えたものだといえることができる。

7. 希望 ― 最後まで諦めてはならない

【希望の再生】やけは、絶望にはじまる。足切断とか盲目になるといったことでの絶望は、やけにと暴発せずにはおれないであろう。が、前向きの姿勢が可能になれば、残された能力に目を向け希望を見出し、絶望の鬱憤を創造のバネに変換し、これらを使つての挑戦ができてくる。やけになつてからでも、使命・義務等を想起してどこかに希望を見つけ出せるなら、ひとは、やけ・絶望を脱

出して、前向きの生をよみがえらせることができる。

希望は、絶望の特効薬（医薬品とちがい100%効く）であるが、その最後の希望さえ失った絶望でも、やけに陥らないための歯止めを人はもつ。絶望は、日本語では、やけ（自棄）と距離をもつ。暗黒の絶望にじっと耐えているかぎり、さらには、忍耐を放棄するとしても暴発などせず、耐えた分を成果として残し、冷静に放棄できるのであれば、まだ、自己破壊の自暴自棄にはなっていないのである。やけにと暴発することを思いとどまりえていたなら、それまでの真っ当な人生を再開できる日がやがてめぐってくる。

絶望（希望の剥奪）は、事故など外からの襲来も多く、自分だけではどうしようもないところがある。だが、やけの暴発は、自分次第である。他者は勿論神ですらひとの意志の自律を侵すことはできない。自分が切れることがなければ、決して暴発・炎上することはない。しかし、いったん自棄になると、そのやける炎は、人生を潰すようにと燃え広がっていく。「あの時、もう少し我慢していたなら」と悔やむ。我慢しきれなかったとしても、「なんでやけを出して自分で自分を潰したんだろう」と無念がる。自棄は、自分を棄てるが、自分が棄てるのである。絶望と違い、自棄は、ひとのせいにはできない。自棄を出さず、これをうちに抑え耐えておれば、黒い繭の中の自分は、次第に変わり成長して繭を食い破って行ける。絶望は、断崖絶壁の際まで押しやられた状態であろう。踏ん張れば、充実した人生の再開の可能性を残す。だが、やけは、そこで自らが飛び降りる。万事休すである。

【自棄は、弊習・呪縛からの解放となる】やけになり、既成の枠を破壊し暴発した者には、再び人生を元通りに構築する安易な道は残されていない。人の既成の大道、楽な列車からは放り出された、飛び降りたのである。やけで、人生は危機に瀕する。だが、疾風怒濤の思春期を過ぎるなどして、その遺棄した自身の屍からよみがえることのできた多くは、潰した過去の重荷を引きずりなが

らも、ひとの尊厳の核をなす理性がしっかりしておれば、それなりの別の人生を切り開いていく。早めに自棄を中止出来た者では、なお焼け残ったものがあるから、これをその後の人生の土台の一部にもできる。

さらには、再生へのラディカルで積極的な構えが持てれば、既成社会への呪縛から解放された新世界が、やけた跡に可能となる。弊習の社会とこれに呪縛された自己を、やけで焼き払ったのであれば、思い切ったことをはじめめる絶好の機会にできる（外国など未知の地に飛び出すのも手であろう。新天地では、陥っていた自棄は多くの場合通用しない）。すべてを棄てて、新世界に向かえば、生まれ変わって新生への希望が見出されてくる。

【自棄から克己・無我へ】やけになってはいけませんが、なっても、最後まで諦めてはならない。やけを途中で消し止めた者は、焼け残ったものから再出発できる。絶望と自棄の苦渋の日々を耐え抜き、生き残った者は、逞しい魂を培っている。さらには、自棄をポジティブに徹底するなら、常人には難しい優れた境地が可能ともなる。克己も無我の境地も、自分の遺棄の徹底でなる。

自棄になるのなら、いっそのこと、徹底して、既成の価値観の自分、絶望する自分自身をも総ざらえに遺棄すると良い。それで小賢しいエゴの希望もその絶望も消失する。利己的個我としての自分の遺棄は、即没我・無我となる。玉ネギの皮（社会での色々の自分の役）の積み重ねとしての、実体のない自分を棄てれば、色即空、空無としての本来の自己（玉ネギの芯）、無我が現成する。やけ＝自棄を無我にまで突き進めていけば、とらわれのない安寧を得て、創造的な生も再開可能となってくることであろう。

***Yake* (despair) as the great abandonment of patience:
Ji-bo / *ji-ki* (suicide / self-abandonment)**

Yoshiki KONDO

The Japanese word *yake* (desperation) is usually expressed as *ji-ki* in kanji (*ji* = self, *ki* = abandon). The mind of a person experiencing *yake* is certainly preoccupied by desperation. Japanese people, however, think of despair and *yake* as substantially different: Despair is not yet *yake*. *Yake* occurs only when one can no longer endure one's despair and abandons it. In the state of *yake*, a person has an irrational outburst of destructive emotional impulses. *Yake* is the noun from of the verb *yakeru* (to burn). A person experiencing *yake* is violent, angry at everyone, rejective, and indiscriminate. In Japan, desperate people sigh deeply and hang their heads melancholically, but a person experiencing *yake* breathes heavily, is enraged, and destroys everything within reach. If such a person is caught in despair, he or she should not abandon this despair and fall into *yake*. Since *yake* destroys the person's social existence and social role through complete neglect, one can recreate oneself anew and develop new relationships. Then, the person can move forward to great *ji-ki* (self-abandonment), in which egocentrism is abandoned and the person achieves the ideal of *mu-ga* (non-ego).